

[教育方法一般]

校内研修における教師の協働が研修意欲に 与える効果に関する事例研究

小林 克樹*

1 問題の所在

教師は、日々授業力を高めるために、数多くの研修に参加している。授業力向上の研修の1つに、授業を観察し、その後授業協議会を行う「研究授業」がある。桐生ら(2008)¹⁾は、研究授業後の協議会において、様々な知識をもち合わせた教師による知識を交換することで自らの授業デザインを構築する手がかりを得ることができると述べている。したがって、研究授業後の協議会は、教師の授業力向上を図る重要な場の1つとして考えることができる。

しかし実際の学校現場は多忙感に溢れ必ずしも協議会は学び合ったり探究し合ったりする形にならない現状がある。桐生ら(2009)²⁾は、実際の協議会について分析した結果、意見が出にくいこと、内容が深まっていけないこと、発表者が固定されること、など協議会の問題点を指摘した。また、黒羽(2006)³⁾は、協働性について、外部者(管理職を含む)の圧力や利害の関心によって生まれたのか、教師集団の自発性から生まれたのかによって、違いが生ずると述べている。これは、外部者(管理職や研究主任等)からの指示で研究授業をさせられ、授業者1人だけが負担を負ったり、よりよい代案や改善点等が示されずに批判を受けたりと、せつかくの努力が報われない状況が現場にはあることに起因すると推察する。

上記の課題を解消する手立てとして、小林ら(2010)⁴⁾による、教員、教育補助員、院生が目標を共有し、責任を分担することで協働が生まれ、多忙化が指摘されている学校現場においても担任教師が変容し、その結果、学習者が落ち着きを見せた報告がある。ならば、研究授業に向けても、教師集団らが目標を共有し、責任を分担すれば、多くの時間をかけなくても子どもの学びを追究する協議会になるのではないかと考えた。そこで本研究は、授業者1人に負担をかけずに、研究授業に向けての授業者の思いや願いを教師集団が共有し責任を分担する指導案検討を行うことで、協議会の質が高まり、授業者の意欲や達成感も高まる校内研修の在り方を検証するものである。

2 調査

(1) 目的

本研究は、研究授業に向けての授業者の思いや願い(目標)を教師集団が共有し、指導案検討会等の工夫で、責任を分担することにより、教師らの協働が生まれ、協議会における会話の質が高まり、研究授業に対する教師の意欲や達成感が向上することを検証する。

(2) 調査について

- ① 調査期間 平成12年6月～12月
- ② 調査対象教員 上越市立保倉小学校 教職員 10名
- ③ 調査内容 研究授業前後の指導案検討会及び協議会
- ④ 調査方法

教師集団が、研究授業において、授業者の研究授業に対する目標を共有するために、まずは研究主任と授業者が指導案をもたずに研究主題を踏まえて、授業の構想に関する話し合い(以下、「指導案なしディスカッション」)を行った。次に、15分～30分の短時間で行う指導案検討会(以下、「短時間検討会」)を関係する職員を増やしながら行った。そして、全体での指導案検討会において、抽出学習者を設定し、その学習者を高める手立てを全職員が考える場を設定した。

⑤ 記録

ビデオカメラ2台で授業協議会が行われる教室全体の様子を前後から記録した。1台は、授業者にワイヤレスマイク

* 上越市立保倉小学校

を付け、授業者の音声を中心に教室後から記録した。もう1台は、教室前より協議会参加者全体を記録した。その際、協議会参加者の妨げにならない位置にビデオカメラを置いた。その他にも協議会に参加した教員に対しての再生刺激法によるインタビューを行い、ICレコーダーに記録した。また、授業者や研究推進委員など授業デザインに深く関わった教員らに対して、インタビューを行い、ICレコーダーで記録した。

(3) 調査1

- ① 目的 研究授業に向けての授業者の思いや願い（目標）を教師集団が共有し責任を分担するような、指導案検討会等の工夫を行うことで、教師らの協働が生まれることを明らかにする。
- ② 調査日 調査日については、6月～12月の期間に行われた4回の協議会を実施した日である。
第1回：6月16日 第2回：7月5日 第3回：11月21日 第4回：12月8日
- ③ 調査方法 協働性を発揮する先行研究を調べ、以下の方法を取り入れ効果を検証することにする。

ア 協働性を発揮するための目標の共有と責任の分担

検証にあたっては、佐伯（1995）⁵⁾の「学びのドーナツ論」を参考にした小林ら（2010）⁴⁾の研究を参考にした。小林らは、「教師の協働がもたらす効果に関する臨床的研究—特別支援を必要とする学級における授業成立までの過程分析—」の論文において「We」（協働する集団）の形成者を、「I」＝担任教師、「You」＝責任を分担して協働する院生・教育補助員、「They」＝授業が成立しにくい学級の学習者と定めて実践を行った。結果、「They」であった学習者が落ち着いたと報告している。

これを本調査に置き換えて考えれば、授業者（「I」）が単独で研究授業を行い、他の教師ら（「They」）を巻き込むのではなく、保倉小学校研究テーマ「思考力の向上を目指した学び合いの工夫」の目標を共有し責任を分担して協働する研究主任、研究推進委員ら（「You」）と「We」（協働する集団）として研修にあたることにした。その結果、他の教師ら（「They」）を巻き込んだ「We」（協働する集団）が形成していくことで、協議会が活性化し、授業者の意欲や達成感が高まると考えた。そこで本研究における「協働する集団」を次のように定義する。

目標に向かって、多方向に意見を議論しながら自分の言動に責任をもち、最後まで一緒になって取り組む関係を本研究では「協働する集団」と定義する。

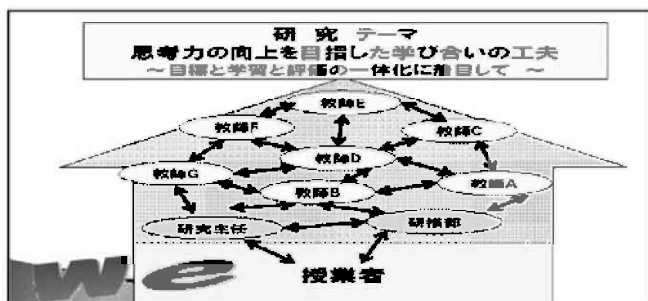


図1 協働する集団のイメージ図

図1に、「協働する集団」のイメージを示す。この図のように保倉小学校における校内研究テーマ（目標）に向かって、まずは授業者と研究主任、研究推進委員が意見を議論し、次第に他の教師らとも議論しながら同じ方向を向いて最後まで一緒になって取り組む研修スタイルを目指す。

イ 具体的な手立

研究授業に向けて「協働する集団」をつくるための手立ては以下の3点である。

①指導案なしディスカッション

研究主任と授業者が研究授業に対する目標を共有するために、まずは指導案をもたずに研究主題を踏まえて、授業の構想に関する話し合いを行った。

②短時間検討会

放課後の時間を使い、15分～30分以内での短時間での指導案検討会を研究推進部または、学年部2人～4人の少人数集団で行った。

③全職員での抽出学習者の手立てを考える場の設定

全職員が参加する指導案検討会において抽出学習者を設定し、その学習者を高める手立てを全職員で考える場を設定した。指導案の本時の流れの支援部分を空欄にして職員が記入した。

上記の手立ての効果を、比較分析するために、第1回研究授業に向けては、具体的な手立てを行わず、第1回協議会

の様子が今後どのように変化していくのかを分析することにした。第2回研究授業に向けて、手立てを行う予定だったが、第2回の授業者が研究主任であったため手立て①については、必要がなく行わなかった。全ての手立てを行ったのは、第3回、第4回研究授業に向けての時である。表1に、調査の流れを示す。

表1 調査のながれ

	第1回研究授業まで	第2回研究授業まで	第3回研究授業まで	第4回研究授業まで
① 指導案無しディスカッション (回)	0	0	2	2
② 短時間検討会 (回)	0	1	2	2
③ 抽出学習者の手立てを考える場の設定	無	有	有	有

④ 分析方法

協議会において教師らの協働が生まれたかを分析するために、協議会会話の内容と授業者の感想に着目し、i. 授業者の発話発生率、ii. ピンボール発話の発生率、iii. 授業者の協議会後の感想で分析することにした。

i. については、授業者の発話が減少すれば、他の教師らの発話が増えると言える。つまり、授業者以外の教師らが、協議会において積極的に発言する機会が増えることで「協働する集団」の形成が図られると考え、授業者の発話をカウントした。

ii. については、久保田(2004)⁶⁾は会話が盛り上がると、「ローカル発話」(局所的に発生する会話や独りごと)が生まれると述べている。協議会においても、ローカル発話は発生する。調査対象である協議会において、ローカル発話が発展して、協議会全体の公的な場においてピンボールのように、授業者への質問を授業者以外の教師が返答し、その内容について別の教師が意見を述べるように発話がつながる場面が見られた。以下が実際の会話である。

授業者 : ジャTさんは自由交流で誰にも説明していないってこと①
 参観者A : そうですね。Rさんに表を見せてください。②
 参観者B : ジャ何してたの?③
 参観者C : はっきりいってフラフラしていました。④

授業者が授業中見とれなかった学習者について参観者に尋ねたところ、参観者Aが②のように返答した。すると授業者が反応する前に参観者Bが③のように、授業者に代わって更なる具体的な様子を聞いている。その返答を参観者Aが答えるのではなく、別の参観者Cが返答した。このピンボールようにつながる発話を参観者が目標を共有し責任を分担する発話「ピンボール発話」と定義し「協働する集団」の形成が図られたかどうかを分析した。

iii. については、協議会後、授業者にしたインタビューの内容である。

⑤ 分析結果

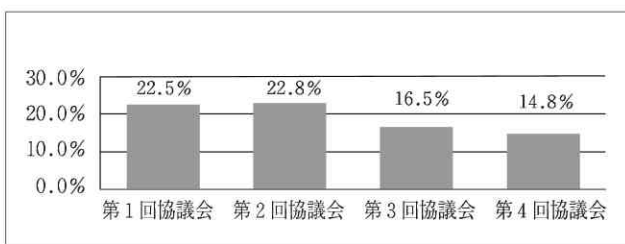


図2 授業者発話発生率

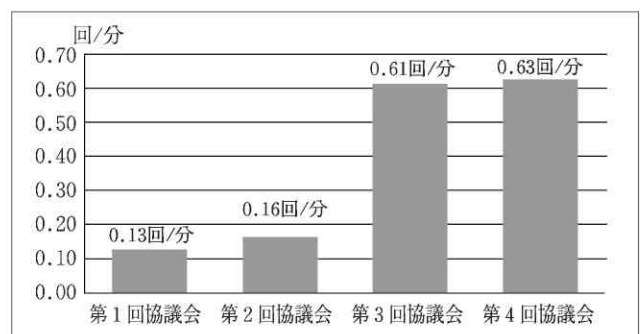


図3 ピンボール発話発生率

ア 授業者発話発生率

まず、図2協議会における授業者の発話の発生率に着目する。図2が、協議会時間内に発生した授業者の発話時間(分)を協議会総時間(分)で除したものである。協議会を重ねるごとに、22.5%、22.8%、16.5%、14.8%と数値が減少している。特に3回目からの減少が目立つ。授業者の話す時間が、第3回協議会から短くなってきた。つまり、参観者の協議会において発言する時間が、第3回協議会から長くなってきているということである。第3回、第4回協議会においては、「協働する集団」を形成するための3つの手立てを行っている。このことから、「協働する集団」を形成する3つの手立ては有効に働き、授業者の発話発生率が下がったと言える。

第1回、第2回協議会の数値が3回目、4回目より数値が高い理由として、第1回協議会までは、「協働する集団」を形成するための手立てを講じていないからであろう。だから、授業者が参観者の質問に答えたり、授業の意図を説明したりする時間が長かった。また、2回目の数値が若干ではあるが22.8%と1回目より数値が高い理由としては、2回目の授業者が研究主任であり、授業の意図や研修テーマについての語りが多くなったためである。

イ ピンボール発話発生率

次に図3ピンボール発話発生率に着目する。図3が、協議会時間内に発生したピンボール発話数を協議会総時間(分)で除した発生率のグラフである。図3から、協議会の回を追うごとに数値が上昇したことが分かる。特に3回目、4回目は2回目の4倍伸びている。このことから第3回、第4回協議会においては、前回の協議会より、参観者が研究授業に対して「協働する集団」となって協議会に関わっていたことが分かる。3回目、4回目の協議会に向けて行った手立てが有効に機能した結果である。

ウ 授業者の感想

—第3回研究授業者感想—

自分一人で授業したというのではなくて、みんながそれぞれ、役割っていうわけじゃないけど(役割を)もって(授業を)つくったような気がします。①ほら、抽出児に注目して下さいっていったじゃないですか だから私が全然見えてなかった子どもたちの様子をいろいろな角度で見てもらったから、変容がすごく分かったし、よかったよ。作る段階から相談にのってもらったし 負担に感じなかったな。すっきりしてすすめられたと思う。一人じゃない気がした みんなで作ったね。②しっかり振り返ってもらったから。〈後略〉

—第4回研究授業者感想—

〈前略〉指導案検討会から思ったんだけど、みんなで手立てを考えてもらったからよい授業ができた③のだと思います。協議会でも、私が発言しなくてもいろいろな先生方が答えてくれて一緒に授業をしているかのようでした(笑)④。勉強になりました。(協議会が)盛り上がったね(笑)。いい雰囲気な協議会でした。〈後略〉

上記の会話は、それぞれ3回目、4回目の研究授業を行った授業者の協議会後にインタビューした内容である。下線部①、②、③から各授業者は指導案を1人で作ったとは考えておらず、みんなで作り考えたと感じている。また、下線部④から協議会において、協働する職員集団が生まれたことが分かる。

以上まとめると次の結論になった。

調査1 結論

研究授業に向けて、①指導案なしディスカッション、②短時間検討会、③全職員での抽出学習者の手立てに取り組んだ結果、職員の協働が生まれた。

(4) 調査2

調査1の結果から、目標に向かって、多方向に意見を議論しながら自分の言動に責任をもち、最後まで一緒になって取り組む協働する職員集団が生まれた。では、その「協働する集団」の形成は協議会においてどのような効果が表れたか以下に検証する。

① 目的

「協働する集団」が形成されると協議会における会話内容や授業者の研究授業に対する意欲にどのような変化や効果が表れるのか明らかにする。

② 調査日

調査日については、調査1に述べた4回の協議会を実施した日である。

③ 分析方法

協議会変容の視点として、協議会会話の内容に着目した。i.協議会に迫る発話発生率、ii.協議会でのI-R-E発話発生率、iii.授業者の協議会後のインタビューと職員アンケートの3つで分析した。また、授業者に意欲については、iii.授業者の協議会後のインタビューと職員アンケートを分析した。

i.①協議会に迫る発話とは、毎回、協議会で話し合いの中心とするために設定する協議会に沿った発話のことである。保倉小においては研究テーマである「目標と学習と評価の一体化」と「可視化」の2点が全ての協議会の議題となっている。この2つの協議会に沿った発話が増えれば、話し合いが横道にそれずに、協議会の会話の質が高まると考

え、発話の発生率をカウントした。

ii. 協議会でのI-R-E発話とは、参観者が質問し、その返答を授業者が行うという一辺倒な発展性の無い発話のことである。平林ら(2009)⁷⁾によれば、メーハン(Mehan)⁸⁾の言う教師が問い(Initiation)、学生が返答し(Response)、教師が評価する(Evaluation) I-R-E構造の授業を脱却することがより活発な話し合いになると述べている。つまり、I-R-E発話が少なくなれば、活発な話し合いになると言える。I-R-E発話が減少すれば、協議会の会話の質が高まると考え分析した。

iii. については、協議会後に授業者にしたインタビューの内容と4回目の協議会後に全職員にとったアンケートの自由記述の欄から抜粋である。

④ 分析結果

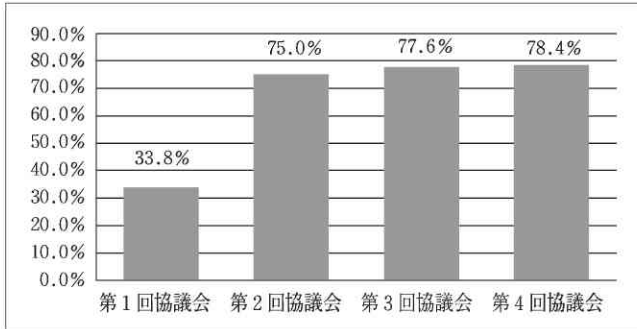


図4 協議会に迫る発話発生率

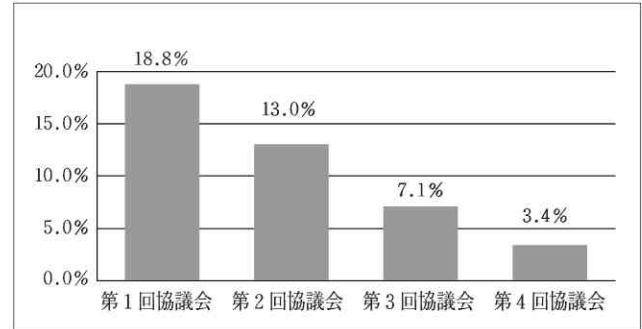


図5 I-R-E発話発生率

ア 協議会に迫る発話発生率

図4が、協議会時間内に発生した協議会に迫る会話時間(分)を協議会総時間(分)で除した発生率のグラフである。協議会の回を追うごとに数値が上昇している。特に第2回協議会以降からの数値は、第1回の2倍伸びている。つまり、第2回協議会以降から、参観者は、ほぼ協議会に沿った会話をしており、協議会の会話の質は高いことが分かる。第2回に研究授業に向けて取り組んだ「協働する集団」を形成する手立て③の全職員での抽出学習者の手立ての効果が表れていると考える。

イ I-R-E発話発生率

図5が、協議会時間内に発生したI-R-E発話時間(分)を協議会総時間(分)で除した発生率のグラフである。協議会の回を追うごとに数値が減少していることが分かる。参観者が質問をし、授業者が答えるという会話内容が次第に無くなっていった。つまり、活発な会話が増加していることが分かる。

ウ 授業者の感想、職員アンケート

—職員アンケート—

- ①全員で取り組んでいて良い。
- ②みんなで指導案、授業を作り上げていくスタイルはとても良い。
- ③検討会や協議会ではたくさんの考えや意見がでるようになった。
- ④可視化に関して、具体的な方向もしくは保倉小の形が見えてきた。

上記の内容は、研究授業が全て終わった後の学年末に研究の振り返りを行ったアンケートの自由記述の抜粋である。ほとんどの職員が記述していた内容を示した。職員アンケート③、④から、協議会において参観者がたくさん発言した結果、保倉小の研究が深まっていたことが分かる。つまり、研究が深まっていく参観者の発言が増えたことから、協議会における会話の質は高まったと言える。

—1回目の授業者の感想—

今回は(4回目の協議会)、ここを絞って例えば抽出児の〇〇さんを中心にとか 目標と学習と評価の一体化に照らし合わせて流れを見るとか というそういう見方をしてやって正直うらやましいな① なんて。〈中略〉学習の形態だったり、可視化のポイントだったり それをいただいて授業に臨むことができているな。② 〈中略〉国語や理科などでも授業(研究授業)をしてもいいかな。③

上記の感想は、4回目の協議会終了時に1回目の授業者へインタビュー調査を行ったものである。下線部①より、1回目の授業者は、4回目協議会に嫉妬している。これは、4回目の協議会にかなりの満足感を感じているからであろう。

その満足感の理由としては、下線部②より、1人で授業作りをしておらず、みんなで授業を作り上げていることが分かるからである。その結果として下線部③のように、もう1回研究授業をしてもよいと思うほど、この授業者は充実感を感じていることが分かる。また、調査1の⑤分析結果のウ授業者の感想にある3回目、4回目の授業者感想からも分かるように協議会において充実感を感じていることが分かる。

以上まとめると次の結論になった。

調査2 結論

教職員の協働が生まれると、協議会における会話が活発化し会話の質が高まった。それに伴い授業者の研究授業に対する意欲や充実感が高まった。

3 結論

本研究では、調査1において研究授業に向けて授業者が1人で徒労感を味わうのではなく、教師らの協働性を発揮するための目標の共有と責任の分担を図る協議会の工夫（①指導案なしディスカッション、②短時間検討会、③全職員での手立ての想起）を行った結果、職員の協働が生まれた。また、調査2から、教職員の協働が生まれると協議会における会話の質が向上し、授業者の研修に対する意欲が高まっていく実態が明らかになった。

以上まとめると以下のことが明らかになった。

研究授業に向けての授業者の思いや願い（目標）を、教師集団が共有し責任を分担する指導案検討会等の工夫をすることにより、教師らの協働が生まれ、協議会における会話の質が高まり、研究授業に対する教師の意欲や達成感が向上する。

4 今後の課題

今回の授業者の思いや願い（目標）を教師集団が共有し責任を分担するような、指導案検討会等の工夫の効果については、4回の研究授業と協議会を分析した結果である。1事例のみの検証であり、今後より多くの事例を検証していく必要がある。また、保倉小は小規模校であり、調査対象教員数も10人と少ない。日常の教員間のコミュニケーションも活発である。これを小規模校ゆえのコミュニケーションスキルの効果としてとらえるのではなく、協働によって働く効果として認識し、教師らがさらなる「協働性」を発揮するための方法の検証を重ね、子どもたち一人一人が輝く学校を目指すための研修方法を模索していきたい。

引用文献・参考文献

- 1) 桐生徹、久保田善彦、西川純：中学生が教師役となる理科授業とその授業検討会の研究，理科教育学研究 48(3)，57-66，2008-03-19
- 2) 桐生徹・久保田善彦・水落芳明・西川純：「学校現場における授業研究での理科授業検討会の研究」，理科教育学研究，Vol.49，No.3，pp.34-36，2009，日本理科教育学会
- 3) 黒羽正見：校内研修における協働性に関する事例的研究－教師の情緒的地形に着目して－，教育実践学研究，8(1)，pp1-10，2006
- 4) 小林克樹・古屋達朗・竹内智光・柴田卓也・若月利春・松風幸恵・中村健志・水落芳明：「教師の協働がもたらす効果に関する臨床的研究－特別支援を必要とする学級における授業成立までの過程分析－」，臨床教科教育学会誌，Vol.10，No.1，pp30-38，2010，臨床教科教育学会
- 5) 佐伯胖：「学ぶということの意味」，岩波書店，pp.65-78，1995
- 6) 公的発話とローカル発話の関連－ローカル発話による認知的葛藤の解消を中心に－（共著），平成16.06，『日本教科教育学会誌』，第27巻第1号，日本教科教育学会
- 7) 平澤林太郎，久保田善彦，鈴木栄幸，舟生日出男，加藤浩：同期型CSCLを利用した遠隔学習における「聞き手の理解の認識」に関する研究，科学教育研究 33(4)，330-337，2009-12-10
- 8) Mehan. H., Learning Lessons, Harvard University Press, 1979.